



本気で社会を変えたい

超高齢少子多死時代に向けて、人生の最終段階に対応できる人材育成の活動を行ってきました。その中で、いつも気になっていたことがあります。それは、社会に良さそうなことをしているだけなのか、それとも本気で社会を変えたいと思っているのか？という問いです。

1つの例を挙げてみましょう。タバコの健康に与える影響を考えて禁煙活動をしている団体があったと仮定します。人口20万人の街で、補助金申請を出して1000万円の活動費を頂き、1年間に4回の講演会を行い、2000人が参加しました。そして参加者の9割が、イベントに参加してとても良かったと評価を頂きました。

これまでは、この報告書だけで、この団体は良い活動をしていると評価されることでしょうか。しかし、この活動をしていたとしても、その街のタバコの喫煙率は前後でまったく変化がなかったらどうでしょうか。その活動は良さそうなことをしているだけと見なされてしまうことでしょうか。なぜ、このような結果になったのかを分析すれば、その理由は明らかです。4回の講演会の参加者は、ほとんどタバコを吸っていない人達だったからです。つまりタバコを吸わない人達を対象に、禁煙キャンペーンの集会を開催しても、変化がなかったという評価となります。

ホスピス・緩和ケア・在宅医療に関する学会・研究会や講演会は、各地で開催されるようになりました。年次大会では会場にあふれる人が集まることもあります。ただ、その一方で危惧するのは、いつも同じメンバーが集まっているのではないのか？という問いです。このテーマに関心のある人達が集まり、お互いの知識や技術を高めることは大切です。しかし、あと6年10ヶ月で2025年を迎えるというのに、このままで良いのだろうか？という疑問があります。まるで禁煙キャンペーンをタバコを吸わない人達だけで行っているようにも見えるからです。

これからは、急性期の病院だけで看取りの対応は困難になります。住み慣れた自宅や介護施設で人生最期まで過ごすためには、誠実に対応できる人材が欠かせません。看取り対応に苦手意識を持っている人が、関わる自信につながるような研修が大切になるはずですが、1-2時間の話を聞いて“わかる”だけでは足りません。誠実にむきあい、たとえ間もなくお迎えが来る人であったとしても、誠実に関わる事が“できる”ことが求められます。

どうしたら一部の関心のある人達だけではなく、それぞれの地域で看取りに関わる人材が増えて行くのでしょうか？そのためには、たとえ看取りという難しく重たいテーマであったとしても、魅

力的であり、わかりやすく、そして誰にでも関わられる可能性を伝えていかななくては広がっていかないと考えています。

エンド・オブ・ライフケア協会が設立されて間もなく3年を迎えます。めぐみ在宅クリニックで行ってきた人材育成のエッセンスが、形として全国で広がってきています。この間に、2日間のエンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座が44回開催され、受講生は2500人を越えました。研修内容を再学習できる地域での学習会も、九州、西日本を中心に広がりを見せ、20箇所以上の地域で開催されるようになりました。広がるためには、魅力的であるだけでは足りません。わかりやすい言葉で、まねことも大切になるでしょう。そして、人生の最終段階に関わるのが苦手と感じていた人が、関わる自信をもって援助に当たることを夢見ています。私は、社会に良さそうなことをしたいとは思いません。本気で社会を変えたいと思っています。 小澤竹俊

新規の相談と在宅看取りの動向

今年になり新規の訪問が増え、そして在宅での看取り件数が増えてきました。1月も2月も月の日数よりも多い数の在宅看取り実績となりました。新規の相談件数も月平均60件を超えるようになりました。明らかに在宅の需要が増えてきていることを実感します。新規の訪問が1日に6-7件や、新規訪問開始が20件を超える週もあります。それでも、誠実に対応できるのも、志の高いめぐみ在宅クリニックのスタッフや、連携して頂いている訪問看護ステーションはじめ多くの仲間がいるおかげです。決して平坦な道ではありませんが、地域で苦しむ人のために、これからも誠実に活動を続けて参ります。

診 療 実 績

	2006- 2016年	2017年 計	2018年 1月	2018年 2月	2018年 計	総計
訪問回数	50,852	9,261	856	815	1,671	61,784
自宅永眠	1,769	216	28	26	54	2,039
施設永眠	218	63	4	5	9	290
在宅 (自宅+施設)	1,987	279	32	31	63	2,329
病院永眠	487	107	14	9	23	617